

お風呂での質問

白木賢太郎 数理工質科学研究科電子・物理工学専攻准教授
(しらき けんたろう／タンパク質溶液学)

また新しい季節が始まり、4月から新しい4年生が配属されてくる。次に配属される学生はもう4期生である。2004年9月1日付けで北陸先端科学技術大学院大学から筑波大学に異動したのだが、その時は本当に大変だった。良いこともあれば悪いこともあるのだと思った。異動するころ、下の子どもがまだお腹に入っていた。しかし引っ越しの準備に追われて妻の体調が急に悪くなったのである。8ヶ月の切迫流産はもちろん母子ともかなり危険なので、石川県小松市の病院に8月24日に入院、わたしは8月31日に茨城県つくば市に、2歳半の娘（福ちゃん）を連れて引っ越した。

茨城県と石川県を数日おきに2歳半の福ちゃんを連れて2往復半した。1往復半は車だった。寝不足と疲労で死ぬかと思った。つくば市から羽田空港に行くつもりが、なぜか道を間違えて高速を降りてしまい、銀座のタクシーの列の最後尾に並んだこともあった。心身ともに限界まで疲れていたのは確かである。しかし何とかなるという思いも

あった。目の前の課題をコツコツと消化していると、12日周期で幸不幸が入れ替わることを、各局が海朝流す占いから学習していた。

福ちゃんは、もともと感受性が強い子供だったこともあって、毎日毎晩、大声で泣き叫んでいた。声がかれて声が出ないのに大声で泣いていた。いくら泣いてもお母さんには届かないのに、お母さんを探して大声で泣き続けていた。声がつぶれて出ないのに、からからになっているのに、涙だけ出して泣いていた。父親のわたしが仕事に出ている間、ヘルパーさんに抱っこされて泣いていた。

一晩中、飲まず食わずのまま、トイレもせず泣いた時が最悪だった。当時の記憶は鮮明に残っているらしい。お風呂で福ちゃんが、いつもの順に質問をした。

「なんであのときは、おうちが真っ暗やったん？」

「なんで、いつも遊ぶ部屋が、寝る部屋やったん？」

「なんであの時、何も食べんと、おしっこも

我慢してたん？」

2歳半の経験が、4歳の子供の小さな心に深く残っている。本当に深く傷ついたのでろう。

「なんでずっと泣いてたん？」

福ちゃんが一番聞きたい質問に向かって、順番にお父さんに聞いていく。

「なんで声が出なくなったん？」

お母さんには聞かない。

「なんであのときは、お父さんと、ふたりやったん？」

お父さんに聞いてみる。

「なんでお母さんは福ちゃんと、いっしょじゃなかったん？」

福ちゃんがいちばん聞きたいこと、それはもちろん、お母さんがなぜ福ちゃんではなく、生まれてくる弟といっしょに居たのかということ。お母さんは、なぜ福ちゃんを置いて、いなくなったのかということ。しかしお母さんには聞かない。お父さんにお風呂で、そっと聞いてみる。

福ちゃんは賢いのでたぶん知っている。お母さんは弟だけでなく、福ちゃんも大好きだということ。だけどお母さんには聞かない。あの時のように福ちゃんを置いて、いなくなるかもしれないから。良く分からないけど、お母さんも傷つけそうだし、弟はまだ赤ちゃんだから。

福ちゃんはたまに思い出して、漠然と不安になるのだらう。その時は、家族そろっ

た時ではなく、お父さんとふたりになったお風呂で、そっと質問する。

それからまた2年の時がすぎて、福ちゃんも4月で小学生になる。そろそろ大人の世界のややこしい決まり事も、わかりはじめていけだらう。この世界は、ただ愛情だけで満たされているのではなく、事情というものがあることを、福ちゃんならすぐに理解するだらう。

やがて、お父さんではなくお母さんに、本当に聞いてみたかったお母さんに、自分で質問してみる日が来るだらう。

「なんであのとき、お母さんは福ちゃん置いて入院したん？」

もちろん予想した通りの答えを福ちゃんには聞く。お母さんもお父さんも福ちゃんのことを大好きだということ、生きていくには事情というものがあるけども、福ちゃんのことにはみんなが愛していることを。そのとき最後の少しの不安が消えて、福ちゃんは本当に愛情で満たされる。そしてやっと、辛かった当時のことを忘れることができる。辛かった記憶、本当に寂しかった記憶、見ず知らずの暗い部屋でお母さんを探して叫び続けた記憶、脱水症状になるまで泣き叫んだ辛い記憶がなくなる。

そしたらもうお父さんに、お風呂で質問しなくて済むな、福ちゃん。